ミラクル実希

▷▷6

周囲からの「支え」実感

病気の子の希望の星に

生きた経験

沢田実希(25)＝ジャパンローヤルゼリー＝が自分を研究対象にしてまとめた論文「IgA腎症を発症したアスリートが競技復帰に至るまでの事例研究。女子400㍍ハードル選手の事例」が、日本トレーニング科学会のトレーニング科学研究賞を受賞した。

論文は福岡大大学院時代の2009年、山崎一彦監督(40)の勧めで取り組んだ。難病の「IgA腎症」を発症した05年11月から09年10月までの4年間を対象に、練習の量と強度が身体へ与える影響を観察。血液と尿検査の数値で「疲労」の度合いを分析した。

沢田は「練習量や強度を高めても尿に含まれるタンパク、潜血は減少し、腎機能の低下は見られなかった。（病状の）経過観察と身体の回復を十分に行ったうえで、（少しずつ量や強度を高める）〝段階的〟な練習法をすれば、競技復帰できる可能性がある」とまとめた。

この経験は今も生きており、「自分の練習を見直し、試合に向けた組み立て方を考える上ですごく勉強になり、分析力もついた」と話す。現在も咲かせてほしい」、元大分高監督の堤紘一(67)は「みんなが応援している」と見守る。

闘病と競技への復帰を通して芽生えた思いを胸にロンドン五輪出場を目指す沢田実希

「みんな応援」

沢田が目指す「五輪」に、男子400㍍障害で3度出場した山崎監督は「素質のある選手は多いが、五輪は人間としての力が大きい選手しか出場できない。沢田には、その力がある」。

福岡大時代から現在も食事の世話をしている加納明美（学生寮経営）は「もう一回、大輪の花を咲かせてほしい」、元大分高監督の堤紘一(67)は「みんなが応援している」と見守る。

沢田は「走れることの大切さは、失って気づいた。今の自分があるのは諦めかけそうな時に、周囲の人たちが支えてくれたおかげ。『支え』という本当の意味を病気のおかげで実感できた」と感謝する。

「病気でスポーツができないと思っている子どもたちの〝希望の星〟になりたい」。闘病と競技への復帰を胸に、沢田の五輪への挑戦は続く。（敬称略）＝終わり＝

（この企画は運動部・坂本陽子が担当しました）